

近代奈良の牛乳壺

はじめに 2001年度に平城宮跡発掘調査部が実施した興福寺旧境内地の調査では、廃仏毀釈の後にこの土地で営まれた様々な生活の痕跡を発掘した。そして、近代史の中では、日常生活のごく身近なところにあったモノが驚くほど早く姿を変え、記憶の中から消え去ってしまうことを確認した。なかでも目を引いたのは、白色の陶器の栓をガラスの壺に針金で連結した牛乳壺である。

機械栓とよばれるこの種の栓は、1875年にアメリカで発明され、日本では明治10年代後半から大正末期、一部では戦前まで清酒、醤油などの壺に盛んに用いられたという（山本孝造『びんの話』日本能率協会 1990）。

出土牛乳びんに関する考古資料としての認識は、西日本においても早く1987年に示されている（兵庫県教育委員会『神戸ハーバーランド遺跡』）。しかしながら、その後は東京を中心とした東日本の豊富な報告例に比べて格段に少ないようである（角南聡一郎「森岡虎夫」銘ガラス瓶について－消費社会の考古学に向けて－『旧練兵場遺跡』善通寺市 2001）。そこで、奈良県における出土例としての報告をおこない、合わせて近代史の資料としての性格を考えてみたい。

出土牛乳壺の特徴 旧興福寺一乗院の敷地東半は、明治9年（1876）4月から奈良地方裁判所として使われ、今日に至っている。牛乳壺は、裁判所の敷地北西部でおこなった平城第328次調査において、塵芥処理用の土坑SK8201から出土した（本書108頁参照）。

関連する資料は3点あり、機械栓がガラス壺についた状態の完存のもの1点、ガラス壺のみ、陶栓（瀬戸口）のみのものがそれぞれ1点ある。

ガラス壺本体は、器高16.4cm、口径2.8cm、底径4.2cmの丸壺である。底は上底になる。型の合わせ目が明瞭であり、人工吹きによる成形であることをうかがわせる。ガラスは、わずかに緑がかかるが基本的に透明で気泡がみられる。口縁部は上端から2.7cmの範囲でゆるやかに膨らみ、中程に機械栓の針金をかける窪みをもつ。この窪みは合わせ目に対して中心で6mmほどずらしている。

胴部には「奈良縣許可 滅菌全乳」、「奈良市 植村牧畜場」の陽刻がある。「滅」が「滅（にすい）」であること、「場」が「場」であることが注意される。肩から胴部上半にかけての部分では、陽刻の摩滅がみられるが、これは壺を洗浄する際にこすれ合ったためであろう。

また、「奈良市－」の上には、2.5cm程の横線が引かれている。この線まで満たすと約200cc、1合1勺ほどの容量となる。

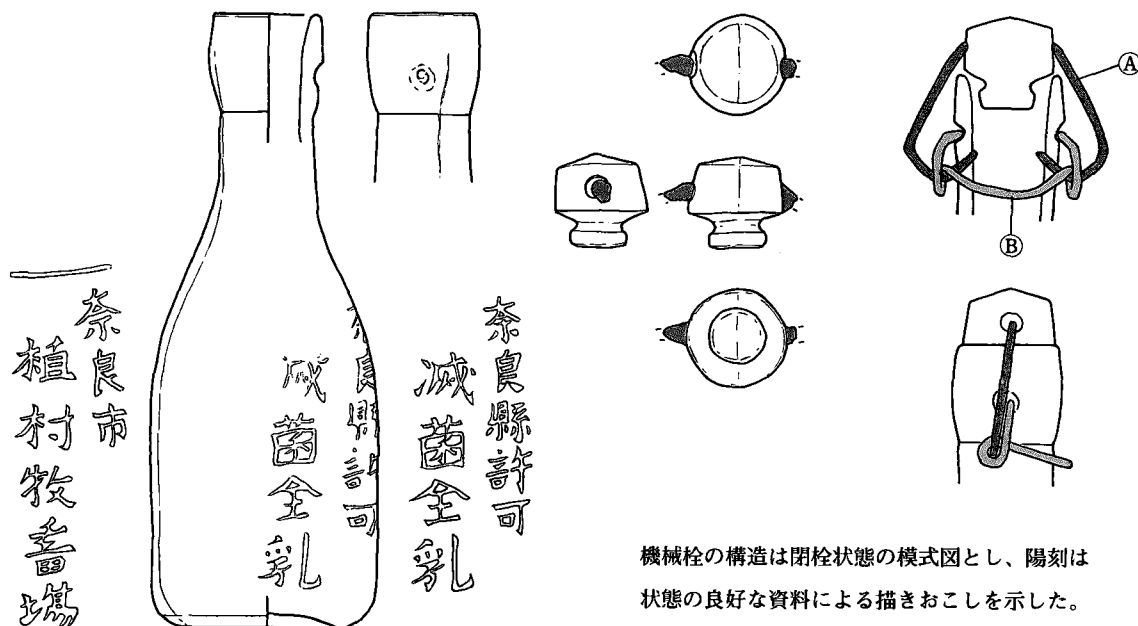


図41 平城第328次調査出土牛乳壺実測図・機械栓模式図 1:2

陶栓は、上面径2.1cm、下面径2.5cmの円錐台状の蓋の下に径1.5cmのつまみがつく。側面に径5mmの貫通孔をもうけ、型成形の合わせ目が稜になる。壺の口縁外径よりもひとまわり小さいことから、栓下部のくびれにコルクなどのパッキング材を装着していたのであろう。

機械部分は、2本の針金からなっている。針金Aは陶栓の貫通孔を通し、左右を耳状に折り曲げる。梃子となる針金Bは、中央を開閉のために弓形にし、針金Aを一重に巻いた後、口縁部左右の窪みにとりつく。輪の前後の開きは90度よりもわずかに広い。

牛乳壺の年代 明治の文明開化から今日にいたる牛乳容器の変遷については、数多くの記録と研究がある（知久祥子「考察」『赤砂利遺跡』白岡町遺跡調査会 1996、他）。

近代の牛乳容器は、ブリキ缶から出発した。日本で最初のガラス壺は、明治22年（1889）頃に東京牛込の津田牛乳店が用い始めたという。壺の製作は当初鑄型にガラスを吹いた「型吹き（人工吹き）」で行われていたが、大正後半には自動製瓶機による機械製造への移行がすすみ、気泡を含まず鑄型の合わせ目のないガラス瓶が生産されるようになる。栓には、内ねじ式のものなどが使われたこともあったが、明治33年以降、機械栓が使われ、瀬戸口からニッケル口に変わり、大正末年頃には王冠栓が導入された。それに応じて壺の口縁形態も変化する。



図42 平城第328次調査出土牛乳壺

食品全体に対する衛生意識の社会的な高まりの中で、明治32年にアメリカから帰国した東京愛光舎牧場の角倉賀道が加熱殺菌した「滅菌牛乳」を販売、翌年に阪川牧場が「消毒牛乳」を、田村貞馬が「蒸気消毒牛乳」を販売する。また、明治33年には「牛乳営業取締規則」が公布され、搾乳販売業も許可制となる。有害な物質を含む容器の使用が禁止され、牛乳容器の主体がガラス壺へと移行した。本資料に陽刻された「滅菌」は、こうした背景によるものである。

「植村牧畜場」は、明治16年（1883）植村武次郎により創業された奈良県下で最も古い牧場で、現在も奈良市般若寺町で植村牧場として経営を続けておられる。聞き取り調査では、昭和初年頃には王冠式のびんを用いておられたこと、出土地周辺が販売圏に含まれていたこと等を教えていただくことができた。

以上により、この牛乳壺の年代は明治30年代から大正年間と推定できる。

歴史資料としての牛乳びん 出土牛乳壺から得られる情報には、① びんそのものからの情報、② 文字史料としての陽刻からの情報、③ 遺跡との関係から得られる情報、がある。これらの情報から、歴史資料としてのどのような視点を提示することができるだろうか。

一般に牛乳びんは、牛乳の容器として食生活史や酪農・搾乳業史のなかで語られることが多い。しかし、ガラスびんの普及や栓の型式変化は、ガラス生産やびん生産の技術的な進歩だけでなく食品衛生についての認識と深い関わりをもち、「度量衡法」による容量の明示にみられるように、近代における法整備の過程とも対応する。

牧場や販売店と出土遺跡を重ね合わせることで、各地域の牛乳受容のありかたや段階差、都市近郊酪農業の推移、販売圏といった地域史あるいは歴史地理学上の課題に接近する材料となろう。また、駅売り牛乳のびんは汽車土瓶とともに鉄道交通史の一面を語る資料として位置づけることができる。

このように牛乳びんは、近代史の多様な側面を鋭敏に反映し、この特質が近代の考古資料の中でも、報告例の多さと関心の高さに結びついているのだろう。（次山 淳）

- * 「壺」は人工吹きのもの、「瓶」は製瓶機によるものを指す。
- * 今回の調査に際し、植村牧場の方々、角南聡一郎氏、渡辺文彦氏から数多くのご教示をいただいた。